



# はらまる通信

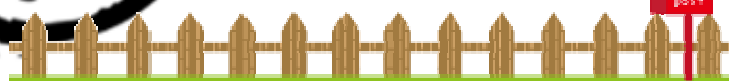
HARA

MARU

TSUSHIN



VOL.76



# ずっとこのまちで自分らしく

原地区社協 福祉講演会のお知らせ

今月23日に原地区センターで行われる福祉講演会の講師である佐治妙心さんは25歳。その若さに驚きますが、25年間の彼女のプロフィールはさらに驚きました。

- ・8歳の時に家族旅行で訪れた広島平和公園の「原爆の子の像」のモデルとなった佐々木禎子さんのことを多くの人に知ってもらいたい一心で、11歳の時に紙芝居を作り、読み語りを披露。
- ・13歳の夏より、広島・長崎の平和記念公園にて読み語りを開始する。
- ・22歳からは活動の場を海外にも広げる。
- ・2012年9月、「人間力大賞」並びに「文部科学大臣奨励賞」を受賞。
- ・その他、複数賞歴あり。



佐治さんの紙芝居を本にしたものを拝見しました。彼女の平和に対する思いが文章や絵に表れていて、迫力があり素晴らしかったです。またそれと同時に、彼女の生の声で読み語りとして見聞きしたら、自分の心はどのように受け止めるのだろうか？と感じました。とても興味を持ち、足を運んでみたいと思いました。

## みどりさんのおすすめレシピ

### 白菜を使ったお好み焼きの作り方

安いからとついつい、丸ごと1個買ってしまい、使い切らずに冷蔵庫の野菜室に、いつまでも白菜があったりしませんか？そんな時に白菜を使って、お好み焼きを作ってみてはいかがでしょうか。キャベツの食感と違ったとろとろのお好み焼きも面白いです。是非お試しください。



#### 材料

白菜 1/2株程度、卵 2個、小麦粉 半カップ、水 適量、油 適量  
だしの素 適量、具材（イカや豚などお好みのもの） 適量

#### 作り方

- ① 小麦粉・卵・水・だしの素をかき混ぜ、ゆるめの種を作ります。
- ② 白菜は繊維を断ち切る方向で、幅5mm～1cmほどの千切りにします。
- ③ ①で作った種の中に、白菜と具材を入れてかき混ぜます。
- ④ フライパンを火にかけ、油を入れ焼きます。はじめは蓋をして中火でしっかり焼きます。火が通ったらひっくり返します。この時は蓋をせずに、表面の水分を飛ばして、パリッと仕上げます。



原地区社協 福祉講演会

演題 『桜の花びらに祈りの心を』

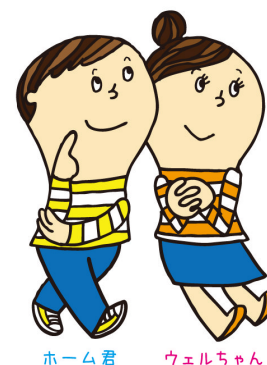
開催日時

平成25年2月23日(土) 13:30～15:00

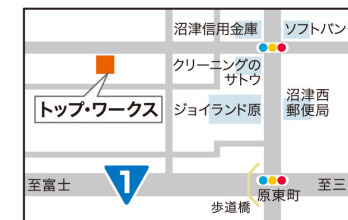
開催場所 原地区センター 多目的ホール

講師 妙蔵寺住職 佐治妙心さん

※託児所の用意があります。ご利用ください。



住まいプロ ホームウェル  
トップ・ワークス



株式会社トップ・ワークス

〒410-0311 静岡県沼津市原町中2-7-2

TEL(055)967-6166 FAX(055)967-7933

0120-54-6166

http://www.topworks.org

# 地域で生産されたものを、地域で消費。

JA なんすん 原産直市

原地域の30人の生産者が、季節に応じた「旬」の野菜を、毎週土曜日の朝8:00より、なんすん原支所北側にて販売しています。

立春を迎え、暦の上でももう春です。季節の旬だった冬野菜もそろそろ終わり、次の季節の準備が始まりました。是非遊びにいらして、はらの旬を感じてください。 原産直市生産者一同



## 白菜を研究する。

アブラナ科アブラナ属の植物で、西洋のキャベツに対し、東洋を代表する葉野菜です。大きくなるにつれて白い部分が太く伸びるため「白菜」と呼ばれるようになりました。原産地は中国北部で、野生の植物からではなく、蕪（かぶ）と漬け菜（つけな）類が自然に交雑して、栽培種としての白菜の原形ができたと推定されています。

料理に合ったところを使うことが白菜をおいしくいただくコツです。外側の葉は、煮もの、きざんで炒めもの、クリーム煮やグラタンなどに。中ほどの葉は、鍋ものや、炒めて八宝菜などに。ゆがいてレモンじょうゆ、ごまじょうゆで食べてもおいしいです。内側の芯は、蒸しもの、甘酢漬けに。また、せん切りにしてさっとゆで、酢じょうゆにつけて食べてもおいしいです。

◎当日出品する野菜が、お天気によっては多少変わることがありますが、ご了承下さい。

2 / 1 6 ・ 2 3    3 / 2 ・ 9 ・ 1 6

大根・雑柑・ほうれんそう・白菜・ねぶか・アピオス

さといも・こかぶ・ブロッコリー・せり

葉ネギ・赤飯・五目ずし・キャベツ・にんじん・水菜

たくわん・手作りこんにゃく・お茶・新米・味噌・漬物・お餅

干物・塩辛・海苔（第2・4土曜日）

※原産直市は、エコロジーな環境を応援します。買い物袋は持参してください。

# ちよつとのんびり コーヒーブレイク

「地方文人の世界」帯笑園を完成させた植松蘭溪

江戸時代中期、花の名所として全国的に有名だった帯笑園。植物収集に熱心だったオランダ商館医師シーボルトが「これまでにこの国で見たもののうちでいちばん美しい（江戸参府紀行）」と絶賛したことを考えれば、その完成度と美しさは世界基準に達していたのではと想像できます。そんな帯笑園を完成させたのが、植松家六代当主、植松蘭溪です。



ご紹介する本は、地方文人「植松蘭溪」が生涯を賭して計画し完成させた帯笑園が出来ていく様子を、植松蘭溪の人生を考察しながら描いています。

植松蘭溪は、自分の本業はあくまでも百姓身分の地主であって、帯笑園は趣味の余業としました。お酒を飲んだり、博奕を打ったり、遊女を買うといったいわゆる3悪に溺れず、余暇と余財を注いで帯笑園をつくりました。帯笑園の素晴らしいところは、美術館と植物園が同居したテーマパークであったこと。また、帯笑園を独り占めすることなく、身分貧富に問わず万人に開放したこと。見学者が望めば、生活空間の居間と蔵までも許可していたそうです。

そんな蘭溪の人生観はどこから生まれるのか。植松蘭溪を囲む様々な魅力的な人物、「白隠慧鶴」や儒学者「並河誠所」、前号の白隠展の記事でも書かせて頂いた京都画壇の「池大雅」や「円山応挙」、または身近な蘭溪の家族との関係性から、読み解いています。それぞれ魅力的な逸話でした。

この本の中に書かれている様々な逸話の一つには、帯笑園の名の由来もあります。帯笑園という名は、江戸時代中期に最も地方を旅し、財政悪化に悩む諸藩や家産の運用に知恵がほしい豪農商の間を遊説して歩いた経世家、海保青陵が名づけました。青陵は、蘭溪の愛に魅了された一人です。蘭溪の客人への愛は千客万来となり、奴童への慈恵は蘭溪への奉仕の励みとなり、永業の田畑への愛情は豊作となり、花卉に丹精を込めれば万面の開花となって帰ってくる。愛は徳に結晶し、笑に帰結する。青陵は蘭溪の愛をその様に捉え、蘭溪の為人を総括して、園の名を「帯笑園」と命名しました。

植松蘭溪の人生に興味を持たれた方は、是非お読みください。インターネット書店、アマゾンでも購入可能です。

地方文人の世界  
著者 前国立歴史民俗博物館  
名誉教授 高橋 敏氏  
(主要著書)  
「日本民衆教育史研究(未来社)」  
「村の手習い塾(朝日新聞社)」他  
発行元 同成社  
定価 2000円